

## 7月1日 年間第13主日

王上 19:15~21 ガラ 5:1,13~18 ルカ 9:51~62

### 1. ルカ

v.51 「イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた。」

神が計画された“決定的な時”というものがあります。聖書はイエスの宣教の開始(マコ 1:15)を、その十字架の死とそれに続く復活と昇天を、そして将来の神の国の到来を、そのような“時”として証言しています。しかし、私たちが信仰の目で見、信仰の耳で聞くのでないなら、神の“決定的な時”の到来はそれに前後する歴史の流れの中に埋没してしまって、判別不能になります。

イエスの弟子たちはそのとき何かを感じ、かつての預言者エリヤのことを連想したようです(王下 1:9-12)。さらにルカ福音書は、エリヤがエリシャを自分の後継者としたときの場面をも想起しているようです(v.61)。神の“決定的な時”の到来である「神の国を言い広める」(v.60)ということが、使徒たちによる宣教の主題であることを、現代のキリスト者はこのテキストから再び聞き取らなければなりません。なぜなら、教会にとって現代の宣教は、今なお使徒たちの宣教の継続以外ではあり得ないからです。

### 2. 王上

オムリは北王国の諸王の中で最も重要な人物の一人であります。彼は北王国の首都をサマリヤに移し、アラムの王ベン・ハダドに対抗して国を強化するために、その子アハブをシドン人の王エトバルの娘イゼベルと結婚させました。この結婚を通して、バアル礼拝が北王国に輸入されました(王上 16:23-33)。このアハブ王とイゼベルの間に生まれた娘アタルヤは、南王国のヨラム王の妻となり、この姻戚関係を通して南王国にもバアル礼拝が導入されました(王下 8:16-27)。

エリヤとその後継者エリシャの物語りは、カナン人のバアル宗教に対するイスラエルのヤーウェ宗教の戦いの伝説という、典型的な文学の型で描かれています。30年余に亘ったオムリ王朝を倒したイエフは、オムリ王家一門とその有力者たち、および国内のすべてのバアルの祭司を皆殺しにし、さらに義母イゼベルの許を訪ねて来ていた南王国のアハズヤ王をも殺害しました(王下 9-10章)。この出来事は単に王朝の交代にとどまらず、ヤーウェ宗教対バアル宗教という二つの世界観の戦いであったとすることが出来ます。

しかし、それで神の“決定的な時”が到来した訳ではありませんでした。後になって預言者ホセアは、より深い歴史理解に立って、この流血の惨事を批判しています(ホセ 1:4-5)。

恐らく、私たちが注目すべき最も大切なものは、恵みとしての神の熱意(イザ 9:6)であります。「しかし、わたしはイスラエルに七千人を残す。これは皆、バアルにひざまずかず、これに口づけしなかった者である。」(v.18、ロマ 11:4-5 参照)

### 3. ガラ

イエス・キリストは、十字架の死によって私たちを律法の呪いから贖い出してくださいました(3:13)。私たちは洗礼の秘跡によって律法に対して死んだ者となり、律法から解放されました(ロマ7:6)。「ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい」(v.13)とは、実に神の“決定的な時”の到来への待望に関わる言葉であることを、現代のキリスト者は再認識しなければなりません。

「霊の導きに従って歩む」(vv.16-18)という聖書の表現が、古来キリスト者の倫理的あるいは道徳的な側面に偏って強調され、“福音の希望”、神の“決定的な時”の到来とは無関係に理解されて来たことを、指摘しなければなりません。「わたしたちは、義とされた者の希望が実現することを、“霊”により、信仰に基づいて切に望んでいるのです」(5:5)という“福音の希望”(コロ1:23)をこそ、現代の教会は再び宣教しなければならないのです。

そのために、今も神の熱意と恵みによって、選ばれた七千人が残されているに違いありません(ロマ11:4-5 参照)。

カトリック横浜司教区では、2007年4月の司教教書で、地区共同宣教司牧委員会のもとに“祈る力を育てる部門”、“信仰を伝える力を育てる部門”、“神の愛をあかしめる力を育てる部門”の三つが設けられることになりました。その土台となるべきものは、神の“決定的な時”の到来を見分ける正しい福音理解です。個々の司祭の説教には一長一短があるにしても、信者自らが主日のミサの朗読配分を通して“神のこぼの食卓の富に与る”(典礼憲章51)という自覚と、そのために聖書を学ぶ努力を大切にする意識があれば、きっと道は開かれることでしょう。

私たちの父である神と主イエス・キリストが、この地区の教会の一人一人の信者を顧みて、使徒たちが宣教した福音の希望から離れることのないように、聖伝と聖書によって親しく導いてくださいますように。

ハレルヤ、アーメン。

## 7月8日 年間第14主日

イザ 66:10～14 ガラ 6:14～18 ルカ 10:1～20

### 1. ルカ

初代教会にとって神の国の宣教は、過去の思い出ではなくて、現在ますます全世界に展開しつつある教会の活動でありました。天上の主は、“世の終わりまで”この宣教活動と“共にいてくださる”(マタ 28:20)という確信を、聖書は私たちに伝えています。

ルカ福音書の七十二人の派遣の記事は、初代教会の宣教がユダヤ人の領域(マタ 10:5-6)を超えて異邦世界にまで拡がって行ったことを反映しているものと思われます。宣教の主題は「神の国はあなたがたに近づいた」(v.9)であり、さらに「神の国が近づいたことを知れ」(v.11)であって、彼らの挨拶「この家に平和があるように」(v.5)はキリストの終末的な救いの訪れを意味していました。

現代の通俗的な理解では、平和運動を推し進めることがキリスト教の使命であるように考えられていますが、その場合に人々が言う平和とは、戦争や紛争が存在しないという理想郷を創り出すことであって、キリストの与える救いとは何の関係もないものです。聖書はそのような通俗的な理解と区別して、「永遠の契約の血による羊の大牧者、わたしたちの主イエスを、死者の中から引き上げられた平和の神」(ヘブ 13:20)を明確にしています。信じる者が「この御子において、その血によって贖われ、罪を赦される」(エフェ 1:7)福音を告げ知らせることが、「この家に平和があるように」であり、「地には平和、御心に適う人にあれ」(2:14)なのです。

この神の国の宣教が、決して初代教会の時代で終わってしまったのではないことを、私たちは今朝の福音朗読で聞かされています。復活されたキリストが“世の終わりまで”この宣教活動と“共にいてくださる”ことを、20世紀の教会は忘れていたと言っても言い過ぎではないでしょう。派遣に際してイエスが命じられた「途中でだれにも挨拶をするな」(v.4)という言葉、ルカ福音書は“宣教の緊急性”として理解しました(王下 4:29 参照)。しかし20世紀の教会は、代々の教会が使徒継承によって受け継いで来た“キリストの終末的な救いの訪れの宣教”に代えて、“教会の政治的社会的活動”こそが緊急性を持っていると解釈して来ました。教会の教導職や奉仕者たちから、次第に聖書の話が聞かされることがなくなり、信者は“現に働いている”(1テサ 2:13)、“生きている”(ヘブ 4:12)神のことばの食卓の富(典礼憲章 51)に与るという体験を知らずに歩んで来たのです。

しかし、全世界のカトリック教会の今朝のミサで、福音の朗読を通して人々は宣教のことばを聞かされています。「神の国はあなたがたに近づいた」(v.9)、「神の国が近づいたことを知れ」(v.11)と。

### 2. イザ

神の民イスラエルが、母なるエルサレムの栄光に養われる日(v.11)の到来を、イザヤは美しく描きまし

た。今朝の朗読配分の直後には、神の裁きの到来の預言が続いています。「主は必ず火をもって裁きに臨まれ、剣をもってすべての肉なる者を裁かれる。」(66:16) 初代教会はこの終末の救いを待望するイスラエルの信仰を受け継いで、キリストの福音を理解しました。ですから天のエルサレムの到来を、神の最後の裁きと結びつけて、ヨハネ黙示録は語っています(黙 20:11～21:8)。

実に教会は、神が御子の血によって御自分のものとなさった(使 20:28)、代価を払って買い取られた(1コリ 6:20)ものなのです。

### 3. ガラ

v.14 「しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。」

もちろん、ここで「わたし」とは使徒パウロ自身のことです。彼は自分がイエス・キリストから受け(1:12)、自らが信じた福音(2:16)を告げ知らせました。彼は十字架の言葉(1コリ 1:18)、十字架につけられたキリストの福音(1コリ 2:2)だけが、私たち救われる者には神の力であることを知っていました。

21世紀のキリスト者が、十字架の福音を再発見することを願って、天上のキリストは私たち一人一人に語りかけておられます。主日のミサの朗読配分は、私たちがそこでキリストのことばに出会う大切な場所です。しかし、それは聖書の中からの朗読ですから、信者一人一人が自ら聖書全体を学んでいることによって、十字架の福音とそれ以外のものとを区別出来なければなりません。単に形の上では“ことばの典礼”が行われていても、信者が十字架の福音を聞くことも理解することもなければ、どうしてキリストのことばに出会うことが出来るでしょうか。

「思い違いをしてはいけません。神は、人から侮られることはありません。人は、自分の蒔いたものを、また刈り取ることになるのです。」(6:7) 私たち一人一人が、十字架の福音を聞き取ることの出来る「平和の子」(ルカ 10:6)になれるように、自らたゆまず励むことは、現代キリスト者の緊急の課題なのです。

ハレルヤ、アーメン。

## 7月15日 年間第15主日

申 30:10～14    コロ 1:15～20    ルカ 10:25～37

### 1. ルカ

v.36 「さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」

この有名な“善いサマリア人の警え話”には、質問者とそれに対するイエスの答えとの間の意識のズレが、意図的に描かれていていることに注目しましょう。この意識のズレは、従来聖書を読む多くの人々から見落とされて来たものです。質問者は「わたしの隣人とはだれですか」と問いました。しかしイエスは、「だれが……隣人になったか」をこそ注目するようにと教えられたのです。

国家にせよ、都市や村落にせよ、それは愛国心や郷土愛によって成り立っている共同体だという考えが、昔からありました。それが失われることは、共同体の崩壊につながるというので、現代にふさわしい愛国心や郷土愛の再興を多くの国の指導者たちが模索しています。我が国の首相が国民に訴えているのも、このことであると考えられます。

同様にキリスト教会も、それが“信者が互いに愛し合う共同体”であることを、私たちは当然のことのようにならされ、また一般にそう思われて来ました。しかし、本当にそうなのだろうかという疑問をもって、私たちがもう一度出発点に立ち帰って考えることを、主はこの警え話で提起しておられるのです。“あなたは、身近なだれかの隣人になったか？”というイエスの質問に、私たちはどう答えたらよいのでしょうか。

カトリック教会のミサでは、開祭の部で会衆は回心の祈りを唱えます。「……聖母マリア、すべての天使と聖人、そして兄弟の皆さん、罪深いわたしのために神に祈ってください。」それでは、次のように質問することは、間違っているのでしょうか。「あなたは、兄弟の罪の赦しのために、神に祈ったことがありますか？」実にこの質問をもって今朝イエスは、私たち会衆の前に立っておられます。

### 2. コロ

教会とは、「神が(御子の)十字架の血によって平和を打ち立て、(私たち信者を)御自分と和解させられた」共同体です(v.20)。共にミサをささげる兄弟姉妹が“お互いに、贖い、すなわち罪の赦しを得ている仲間である”(1:14)と認め合い、この十字架の福音を信じることと、神の国を受け継ぐ希望を共有するために心をつつにするよう、主は聖書を通して呼びかけておられます(1:23)。

ところが実際、これまで私たち信者一人一人が、このような福音理解(1:14)と福音の希望(1:23)を共有して来たかという、残念ながらその実感は殆どありません。なぜなら現代のキリスト者の通俗的理解は、“人間は互いに本来隣人なのであるから、私たちは励んで善いサマリア人のような善人になろう”ということでありました。教会は“善人の集まり”であるという前提に立って、外の世界に対しては“あなた方も善人になりなさい”と呼びかけるキリスト教であります。



## 7月22日 年間第16主日

創 18:1～10 コロ 1:24～28 ルカ 10:38～42

### 1. ルカ

ルカ福音書が伝えているこの伝承では、マルタは“もてなしのためにせわしく立ち働く女”であり、それに対してマリアは“主の足もとに座って、その話に聞き入る女”であります。マルコとマタイが伝える“イエスに香油を注いだベタニアの女の話”(マコ 14:3-9、マタ 26:6-13)は、恐らく独立した伝承であって、ルカの知らないものでしたが、それより数十年後に成立したヨハネ福音書では、この二つの伝承が一つに結びつけられています(ヨハ 12:1-8)。

ルカが、この伝承を用いることによって訴えようとしたのは、“御言葉に聞く”ことの大切さでありました。そしてそれは、当時の状況においては、“初代教会の宣教する福音に聞く”ことであったことを理解しましょう。異邦人世界に急速に成長して行った初代教会において、共同体とその集会のために世話をする仕事の量が増大したとき、それでもなお教会にとって“本質的に必要なことはただ一つだけ”であることを訴えたのです。

教会にとっても、一人一人のキリスト者にとっても、キリストの福音に耳を傾けることは最も大切なことです。なぜならそれは「信じる者すべてに救いをもたらす神の力」(ロマ 1:16)であり、キリスト教存続の「よりどころ」(1コリ 15:1)だからです。それは聖伝と聖書によって伝えられていて、だれでもその母国語で読んで理解することが出来ます。

大変残念なことに、現代の教会で実際に語られている説教は、カトリックでもプロテスタントでも、かなり怪しげなものが殆どであると言わなければなりません。ドラえもんのアニメ物語りのように、次々と創作されるイエス物語りと道徳的訓話、現代の社会問題や世界平和をテーマにした新作キリスト教講話が一方にあり、他方には説教者が聖書の中から切り出したあるテキストを材料にして、個人的な所感を述べる独演会が、会衆と“使徒たちが伝えた福音”との間を隔てて来ました。

今朝の福音の朗読を通して、天上のキリストは私たちに呼びかけておられます。“必要なことはただ一つだけ”なのだと。それは、信者が自ら聖書を開いて、自らそれを読むことによって、“使徒たちが宣教した福音”に聞き入ることなのです。

### 2. コロ

使徒の宣教を、「キリストの体である教会のために、キリストの苦しみの欠けたところを身をもって満たす」(v.24)と、パウロは表現しています。それは、「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた」(ロマ 4:25)というキリストの苦しみを、信者たちが深く理解するために宣教しているのだ、という意味でした。この“キリストの十字架と復活の福音”によって明らかにされた「秘められた計画」(w.26-27, 1:5,12,23 参照)を語る事が、使徒たちの宣教であり、これを継続する

ことを歴史の教会は委ねられて今日に至りました。それがいわゆる“使徒継承”と呼ばれているものです。

ですから現代の教会の宣教の源泉も、使徒たちが伝えた聖伝と聖書であります。どんなに混乱した時代の中にあっても、現代のキリスト者は教会が受け継いで来た聖伝と聖書に、自ら容易に触れることが出来ることを、感謝すべきです。

使徒パウロが自分の後継者であるテモテに語った次の言葉に、生き活きとした感動と感謝を感じる信者は幸いです。「そして、多くの証人の前でわたしから聞いたことを、他の人々にも教えることの出来る忠実な人たちに委ねなさい。キリスト・イエスの立派な兵士として、わたしと共に苦しみを忍びなさい。」(Ⅱテモ 2:2-3)

### 3. 創

アブラハムが“三人の人”をもてなした物語りを、ただの客人をもてなす親切を教える教訓と解釈するのは見当外れなことです。そうではなくて、これは“主がアブラハムを訪れた”物語りなのです。

“急いで天幕に戻り、小麦粉三セアほどをこねて、パン菓子をこしらえ”、“牛の群のところへ走って行き、おいしそうなお子牛を選び、急いで料理させる”というのは、主の来訪を迎えたアブラハムの信仰的応答でありました。決して、レストランで客の注文を受けたキッチンの描写のようなものではありません。

聖伝と聖書を通して私たちが訪れてくださるキリストを、私たちがどのような姿勢でお迎えするべきかを、この物語りから学ぶことが出来ます。神のことばを聞くには、それにふさわしい準備と心構えが必要なのです。もしアブラハムが、玄関で立ち話をするような仕方での三人を迎えていたら、彼は主の言葉を聞くことはなかったことでしょう。

私たちが、信仰をもってキリストの福音を聞くということの重みを自覚しなければ、神のことばは“わたしたちのもとを通り過ぎ”(v.3)で行ってしまいます。ですから、私たちは信仰の目を上げて見ようではありませんか。聖伝と聖書を通して、イエス・キリストは私たちに向かって立っておられます(v.2)。

ハレルヤ、アーメン。



## 7月29日 年間第17主日

創 18:20～32 コロ 2:12～14 ルカ 11:1～13

### 1. ルカ

私たちのミサで、後半の感謝の典礼は三つの部分を含んでいます。“供え物の準備”、“奉献文”、“交わりの儀”です。“ローマ・ミサ典礼書の総則(21)”は、会衆は奉納の供えものの準備のときは座り、奉納祈願からミサの終わりまでは立っていると定め、これを国民性に適応して変更するのは、司教協議会の権限であると述べています(その司教協議会の決定も、使徒座の認証を得るまでは有効にはなりません)。

この“交わりの儀”の中に“主の祈り”が取り入れられたのは、4世紀にさかのぼり、“日毎の糧”を聖体のことであると理解して、会衆がその拝領によって一つに結ばれる祈りと思なされて来ました。“成人のキリスト教入信”のための第一段階である“入門式”で行われる“主の祈りの授与”には、次のような解説がなされています。「この祈りは古代から、神の子どもとされた人々の祈りであって、将来、感謝の祭儀で信者と共に唱えるものである。」

ルカ福音書は、これに“しつように頼む人の譬え話”を加えて、良いものを与えてくださる天の父を描いています。「天の父は求める者に聖霊を与えてくださる」(v.13)というのが、ルカの解釈であります。すべてのキリスト教の祈りに対する天の父の応答は、聖霊の御業であるという救済史的理解を、私たちはここで聞かされているのです。

殆どのカトリック教会で主日に使われている“聖書と典礼”には、本文の中には“試用版”の公式祈願が印刷されていて、伝統的な各年共通用公式祈願は最後のページに載せられています。このため、たいていの司祭が、… 恐らく安易に …、主日のミサで“試用版”の公式祈願を唱えています。実はこの両者の“祈り理解”はかなり異なっていますから(しばしば神学的に対立している)、私たちはこのルカ福音書の主張を拠り所にして考えてみる必要があります。

### 2. コロ

“主の祈り”の中で「わたしたちの罪を赦してください」と唱えるときに、これをキリスト教信仰から切り離して一般人に当てはめて理解してはなりません。「罪の中にいて死んでいたあなたがたを、神はキリストと共に生かしてくださいました。神は、わたしたちの一切の罪を赦し …… てくださいました」(v.13-14)という信仰の上に立って、“主の祈り”は唱えられなければなりません。

私たちキリスト者は、“わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたキリスト(ロマ 4:25)”を受け入れたのですから(2:6)、信仰に反するこの世の論理で、人間の熱心な祈りの力で神からの赦しを獲得するというような解釈をすべきではありません(2:8)。人は洗礼によって罪の赦しを与えられるのであって、イエス・キリストへの信仰と洗礼の恵みなしに、祈りの力によって罪から解放

されるなどということはないのです。

### 3. 創

さらに“主の祈り”では、罪の赦しの祈願に続いて「わたしたちも自分に負い目のある人を、皆赦しますから」という言葉が唱えられます。しばしばこれは、私たちが自分の罪の赦しを獲得するための条件のように受け止められて来ました。

アブラハムは、ソドムとゴモラの町の赦しのために神に祈って言いました。「もしあの町に正しい者が五十人いるならば……。」五十人いるなら、それは十分な条件になるように思えました。しかし実際にはアブラハムは不安になって、その人数を次第に値切り、交渉は成功して最後に十人でも赦そうという神の言質を得たのです。しかし結果は、その十人さえいなかったのに、「神はアブラハムを御心に留め、ロト(たち三人)を破滅のただ中から救い出された」(19:29)のでした。そこにあったのは、神の憐れみと恵みであって、決して条件ではありませんでした。

私たちキリスト者は、キリストの十字架の血によって罪赦されたのであって、「これは、神の豊かな恵みによるものです」(エフェ1:7)。しかし「思い上がってはなりません。むしろ恐れなさい」(ロマ11:20)。私たちのキリストは、「わたしたちはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか」(ロマ7:24)というどん底から、私たちを引き上げてくださいました。

これが“主の祈り”の正しい解釈であり、すべてのキリスト者の祈りに答えてくださる聖霊の御業です。

従来カトリック教会では、信者個人の自発的な祈りについて殆ど教えたり指導することがありませんでした。そのような伝統が久しく忘れられていたのです。そのため、主日のミサの“共同祈願”で、どう祈ったらよいのかがはっきりせず、迷走しているように見えます。個人の祈りが、人間が得手勝手に神に指図をするような内容になる危険性を、しばしば含んでいるというのが現実です。

アブラハムは神と交渉して、敗れました。そして、祈りとは神との交渉ではないことを、それはただ神の憐れみと恵みへの信仰告白であることを、証しました。すべてのキリスト教の祈りに対する天の父の応答は、聖霊の御業であるという救済史的理解を、私たちは今朝聞かされているのです。

ハレルヤ、アーメン。